

『魔法のダイアリー』プロジェクト 最終成果報告書

報告者氏名：千松 聡司

所属：大阪府立寝屋川支援学校

記録日：2019年2月8日

【対象児の情報】

・小学部 第5学年

・障害と困難の内容

◎知的障がいを伴う自閉症（療育手帳 B2 軽度の知的障害がある）

- ・精神保健福祉手帳 2 級を持っている（日常生活が著しい制限を受けるか、又は日常生活に著しい制限を加えることを必要とする程度）

S-M 社会生活能力検査（2018. 9. 3 実施）

CA（生活年齢 10 - 8） SA（社会生活年齢 9 - 7） SQ（社会生活指数 90）

SH（身辺自立 7 - 8） L（移動 10 - 2） O（作業 9 - 6） C（コミュニケーション 10 - 8）

S（集団参加 8 - 7） SD（自己統制 10 - 11）

太田ステージ

StageⅣ 後期

K 式発達検査による 全検 DQ は 72。

・当初のねらい（計画書の学習目標）と活動による方向性の確認状況

①自己分析を通して、客観的に自分を見る。肯定的に自分を振り返る。（自己理解）

②他者分析を通して、他者のがんばりを認める経験を重ねる。（他者理解）

③他者から認められる役割を持つことで、自身の行動を振り返ったり、好ましい言動を取ろうとする態度を養う。

・実施期間

平成 30 年 5 月～平成 31 年 2 月

・実施者

千松 聡司

・実施者と対象児の関係

クラス担任

【活動内容と対象児の変化】

●対象児の事前の状況

- ・**言語面**：会話が成立する。聞かれたことに対して適切な返答ができる。行動に伴う根拠や気持ちを的確に表現できる。ニュースで話題になっていたことや、YouTube の話を担任とすることができる。
- ・**行動面**：特定の声や音に対して反応し、それがストレスとなって他害に出ることがある。他害をすることが好ましくないということはよく分かっているが、止められないことが多い。
物事の善悪の判断ができる。褒められることが好きなので、褒められるような行動をすることができる。
他害が出た際には、教員の言葉かけに反応し、即座に「ごめんなさい」と言う。
- ・イヤーマフについて：当初はカッコ悪いと言って装用しなかったが、6 月後半より積極的に装用するようになった。
元々イヤーマフを装用することで、楽に過ごせることは分かっている児童であるが、周囲の児童（自分の好きな児童）がイヤーマフの装用をやめたことに影響されて、つけないこと＝カッコいい、という思いがあった。しかし、担任からの働きかけ（「イヤーマフをつけることと、友だちへ嫌なことをすることと、どっちがカッコいい？」）や、クラスメイトが装用していることを受けて、進んで装用できるようになったと考えられる。本人に聞くと、「楽だから」と言う。
- ・6 月の本校の精神科相談にて、精神科の受診を決定。7 月末（夏休み）より服薬を開始。現在経過観察中。
1 か月に 1 回通院、診察があり、薬の量も相談中。
→9 月以降は、常用薬としてエビリファイ、頓服薬としてリスパダールが処方されている。

●活動の具体的内容

・**行動分析**

4 月より、苦手な声を出す児童（K）、（L）に対して苦手感を持っていた。多い時には、1 日に 10 回を超えるような他害があった。注意を受けると、「ごめんなさい」「わかってるよ」と言ってその場を過ごしていた。
4 月後半より、欠席が増え始めた。だいたい週に 1、2 日は休むようになる。
5 月は連休前後から月末まであまり登校できなかった。（登校できるのが週 1 回程度）やはり、学校に来ると穏やかに過ごせることは少なかった。
5 月末より徐々に登校できてきたので、6 月は、不適応行動の回数と、その要因を記録し、原因を探ることとした。その結果、6 月の登校回数 16 日のうち、ほぼ毎日他害が見られた。



朝、登校時の気分と関連があると考え、毎朝『アプリ：気持ちメーター』で、朝の時点での気分をつけ、参考にした。

朝の気分が様々であるが、バスの中が騒がしかったり、家庭で何かあったり、学校に行きたくない気分の時だったりすることが関係していると思われる。

また、こちらが不適応行動をカウントするにあたっての分類を以下のように行った。

●不適応行動をカウントする際の定義

他害：他者を傷つける行動をした時

暴言：他者の気分を害するような言葉を発した時

奇声：他者へ向けて甲高い声をあげた時

逃げる：対象となる人に分かるように逃避を行った時

退行：だだをこねるような言い方をした時

に分類してカウントをした。

行動記録を取るにあたって、以下のようにどのような状況で事象が発生したのかを、時間に沿って記録した。以下は、その例の一部である。

例 1：6/13（水）の行動パターン

9:00	登校 オレンジの気持ち（少々不機嫌）
10:00	廊下ですれ違った学年の児童Lに対して、奇声、暴言「わ！」と大声
11:00	クラスメイトKがパニックになっていることに対して暴言、その後耳元で奇声 給食中、少々崩れ気味のKの声に対して、「Kくんはおかわりないからね！」等、 Kがパニックになりそうな言葉をチョイスして言っていた。
12:00	廊下でLを発見すると、大声を出しながら階段を降りて下足場から出口へ。
13:00	下校
	朝からKを気にしていた。行動を起こすたびに、クールダウンできる教室で気持ちを整理し、本人の気持ちを聞いた。

例 2 6月19日（火）の行動パターン

9:00	緑の気持ち（普通） 昨日の地震のため、K不調。 着替えの際、Kのイヤーマフを取り上げて大声。
10:00	
11:00	掃除の場所が増えたことでイライラ。教師に対して暴言。
12:00	クラス担任外の指導があった際、駄々をこねるように言う。強めの言葉と駄々をこねるような言葉の繰り返し。
13:00	大好きな図工の前なので、気分はとてもよさそう。
15:00	下校時、廊下でLを発見。遠ざかったことを確認してからバスへ。
	朝、担任から、「昨日の地震でKくんは怖がってるからね。今日はもしかしたら気持ちが崩れることが多くなるんちゃうかな。しんどかったら教室出てもええよ。」と話をすると、「わかった。」と言ったそばから耳元で大声。 クラス担任外の教員とのやりとりで、イライラはずっと続いていた。 好きなユーチューバーの話を担任として、少し気分転換になった。

・記録から推察できたこと

- ①教師から指導されることもあるが、その後はターゲットのKやLに何らかのアクションをかけることが多い。
- ②好きなこと、集中できることをしていると、他への意識が向かないことが多い。(漢字テスト、国旗クイズ等)
- ③イヤーマフを装用すると、聞くべきことを聞けなくなることが増える。
- ④学校でのイライラや他害は朝の気分にかかわらず起こす。しかし、その回数(沸点)は朝の気分に関係していると考えてよい。
- ⑤相手がどういうことを言えば泣いたりパニックになったりするか、よく観察して言っている。
- ⑥教師の目線がないところを狙って他害をする冷静さも持っている。(そうでないことも多いが)

・夏休み以降

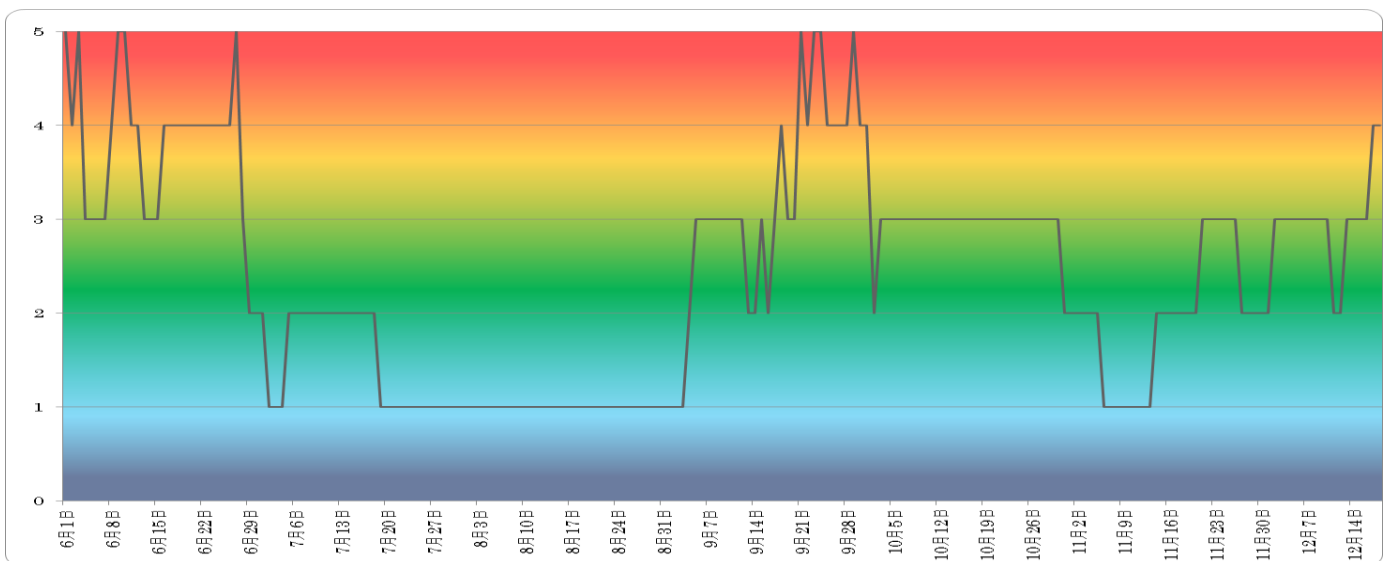
8月末の登校日～現在：春に見られたような登校渋りはなく、不調時の欠席のみである。

家庭では、「今日はさんぼやから嫌やなあ」等、登校したくない気持ちを言うことはあるようだが、登校はできている。

依然、顔つきが変わることがあり、気持ちが整わないこともあった。しかし、我慢をしている様子が多く見られるようになった。(以下の「反だちへの関わり」のエピソード参照)

9月18日(火)より、行動に関する記録、アプリ『気持ちメーター』による朝の気分の記録を再開。

気持ちメーターによる『朝の気分』の推移



※記録に関して、8月は未入力

介入前後の6月、行事の重なる部分では、気分が優れないことが多いが、10月以降は概ね安定していることが伺える。服薬の影響も有ると考えられる。

※対象児と実施者との間で決めた、色が示す気持ち」

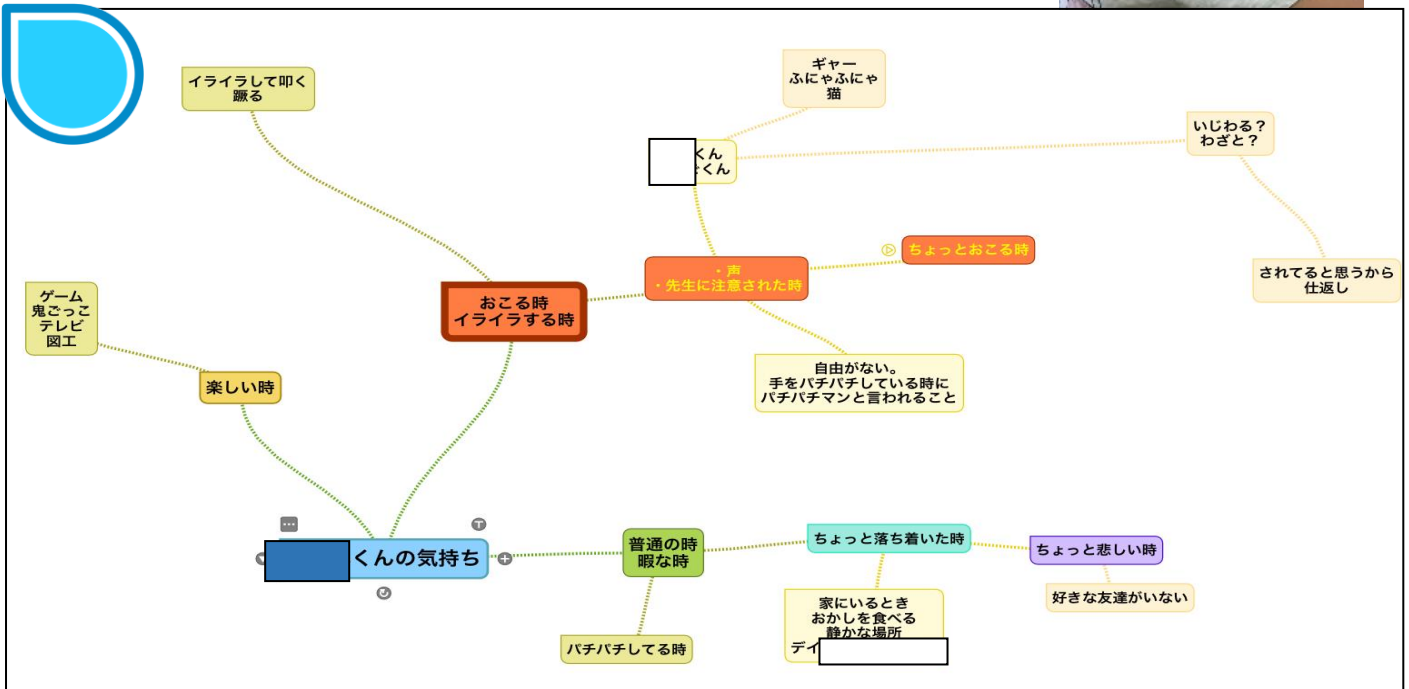
赤	黄色	緑	水色	青
イライラ	少しイライラ	普通、何ともない	落ち着いて、いい気分	めちゃくちゃ楽しい

・**取り組んだこと**

Simple mind に入力をする対象児

①自己分析、自己理解

アプリ『simple mind』を使用し、『自分のこと』をまとめた。
 ポイントは、好きなこと、好きな授業、嫌なこと、怒る時のことを入れ、実施者と話をしながら気持ちを整理した。「自分でやってみる」と言って、ローマ字入力で取り組んでいた。



『自分がイライラしている時にも、しっかりと意識があり、明確な理由があること』『それでも我慢できずにやってしまうことがある』『本人はそれを後悔することもあるし、自分が嫌なことをされているから仕返しとしてやっている時もある』ということ、本人も自覚している。

②他者分析、他者理解

i) 状況に合った言葉を考えてみよう

学習プリント：セリフを考えてみよう

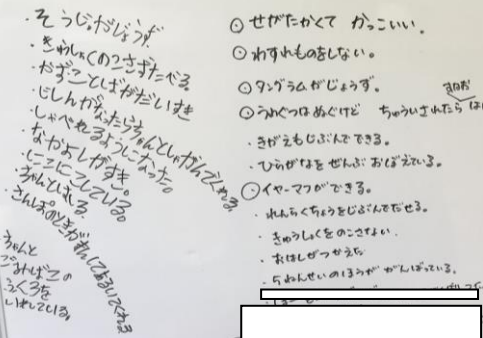


他者の気持ちが理解できないのか?と考えるも、全くそうではない。左図のように、状況に合ったセリフを考え出すことができるし、困っている人には優しくしようという道德観も持ち合わせている。他にも、窓ガラスを割ってしまった場面、兄弟喧嘩をしている場面、泣いている友だちへ言葉をかける場面等、様々なセリフを当てはめる学習をしたが、いずれも好ましい言葉や適切な表現を使って取り組むことができている。

ii) 友だちのよいところ、がんばっているところを見つけてみよう

ホワイトボードを使ったやりとり

Kくんのよいところ



(ア) クラスメイトKについて、「よいところ、がんばっているところを書いていこうよ」とまとめた。

左図の右側は教員が、左側は対象児童が書いたもの。(発信は対象児童)

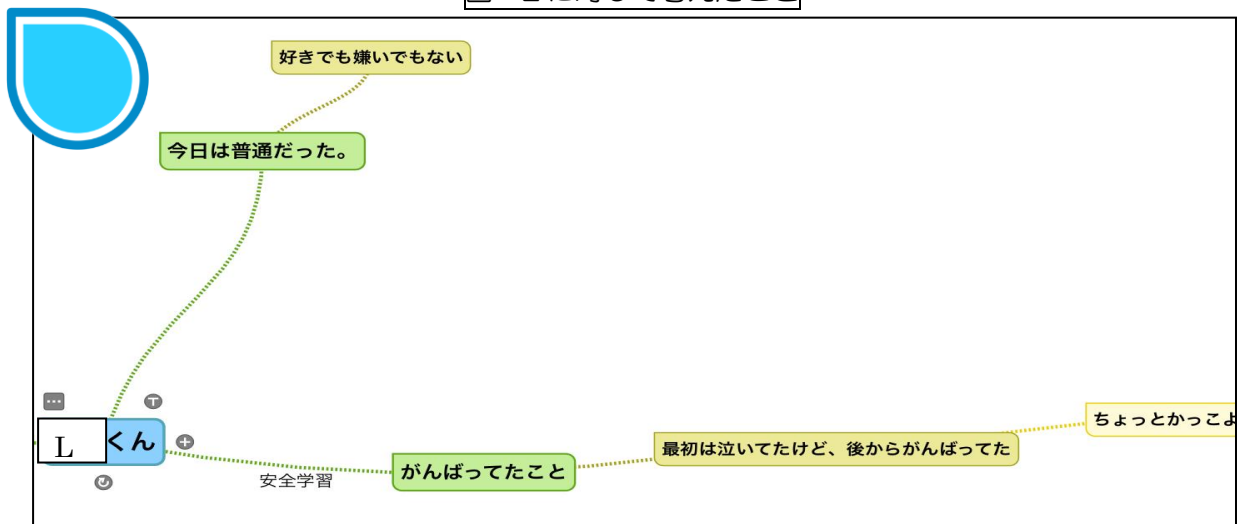
ほんの15分程度の話の中で、これだけ対象児童がKくんのよいと思っている部分が表現できた。

このかわりの中で、『イヤーマフができる』ことがカッコいいと対象児童は思い始めるようになり、イヤーマフを使うことに抵抗がなくなってきたようである。

(イ) 学年の児童Lについて、この児童は初めてのことに不安があり、激しい声を出しながら「ニャー」「ギャー」とパニックを起こすLくんに対する苦手意識が大きかった。

このLくんについても、「最初は泣いてたけど、後からがんばってた」「ちょっとかっこよかった」と振り返っていた。

図：Lに対して考えたこと



「どうしてニャーって言うと思う？」と問うと、「きっと苦手なことが怖いんちゃうかな。」と分析していた。

③社会的な役割

9月に入り、後期の児童会役員の立候補者を決める頃、担任からクラスの中で、「児童会役員になりたい人？」と投げかけたところ、対象児は真っ先に手を挙げて、「ぼく、やってみたい」と言った。

自分の頑張りポイントを振り返ったり、言動を考えられたりするきっかけになるだろうという期待を込めた。結果、立候補者として学部の児童の前で演説をし、自分で考えた約束を3つ発表した。

1. 元気にあいさつをします
2. 先生やみんなの手伝いをします
3. みんなに優しくします

その際、絵の得意なクラスメイトに『はらぺこあおむし』の顔や、1～3の約束をイラスト化してもらい、「みんなに色々してもらった。学校ってすごいね。僕もみんなにやさしくするわ。」と言っていた。

●対象児の事後の変化

友だちへの関わり

①クラスメイトKについて

7月中旬～9月にかけて、安心して関われるようになった。要因としては、Kくんが落ち着いていること。多少崩れても、「大丈夫だよ。」「元気だしや。」「僕が代わりにやってもいい？」と励ますような言葉かけがよく見られている。(もちろんイヤーマフもつけている)



※エピソード1 校外学習にて

モノレールの切符を買う際にKくんがどれを買ったらよいか分からない。少し困り気味のKくんに対して、押すべきボタンを順番に1つずつ指差して教えていた。(写真手前はKくんではないが、このように丁寧に教えていた)

※エピソード2 移動

以前は、他害を加えたいが為に、Kくんと手をつなごうとしている対象児童であったが、優しく手を引いてリードすることができるようになった。



※エピソード3 教室にて

7月末(夏休み中)の宿泊学習の前日、カップヌードルミュージアムにて、カップヌードル作成体験をする際のメモ(4つの具を選択し、伝えるためのもの)を、Kくんの分も書いていた。Kくんは、読むことができるが、書くことは得意ではない。そのことを知っている対象児童は、「Kくんどれとどれにするの?」と聞きながら、メモを書いていた。

②学年の児童Lについて

やはり、苦手意識は拭えないものの、他害に出たり、暴言で罵ったりすることは減ってきた。カッとなって強い言動を取ることはあるが、周囲の教員の働きかけで、「ちょっと静かにしてよ」「今はまだ大丈夫」等、少し意識が変わってきているように見える。

また、「ちょっとしんどいから廊下に出ててもいいですか」や、「離れたい」と担任に伝えてその場を離れて回避することも少しできるようになった。

※エピソード 運動会練習

行事が苦手なLくんは、見通しが持てるまでパニックを起こしている。初めての練習では、全く落ち着くことなくその時間を終えていた。そんなLくんを見て、泣きながら「あっちに行きたい。」と少し離れた場所へ移動。よほど我慢していたのか、しばらくさめざめと泣いていた。しかし、気持ちは整わず、思っていることを担任へつぶやいていた。

→強い衝動に駆られながらも、我慢ができ、逃避することができていた。

【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

①自己分析を通して、客観的に自分を見ることで、自分の得意と不得意が分かり、不適応行動の減少につながったのではないかな。

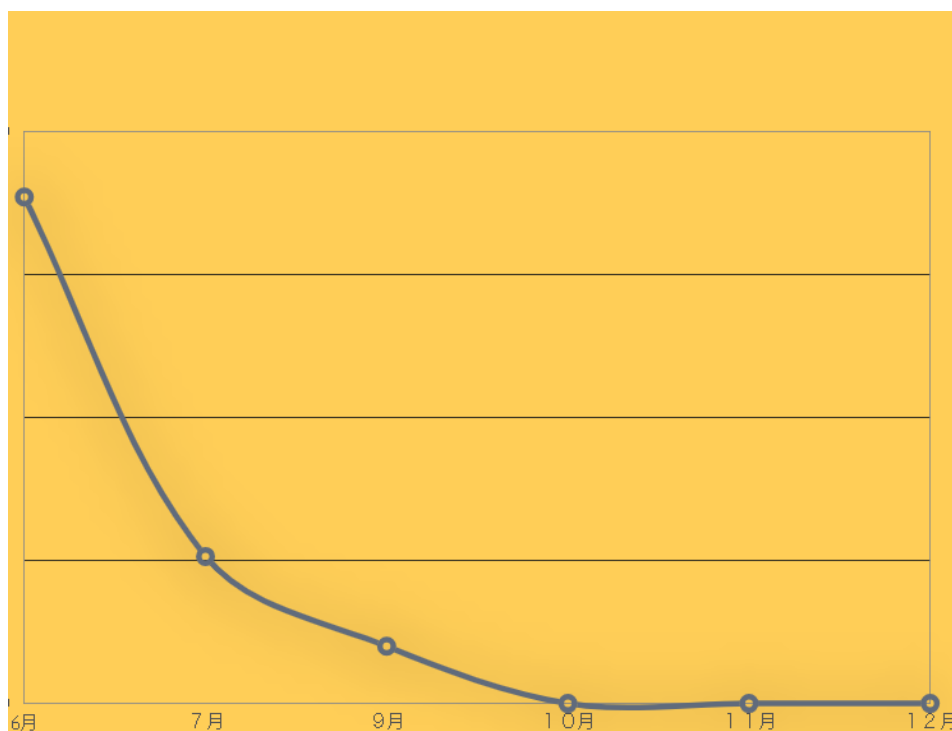
②他者分析を通して、他者のがんばりを認める経験をする中で、他者のことをポジティブに捉えたり、ネガティブな側面の受容ができるようになってきたのではないかな。

③他者から認められる役割を持つことで、自身の行動を振り返ったり、好ましい言動を取ろうとしたりすることができるのではないかな。

・気づきに対するエビデンス

6月～12月までの不適応行動のグラフは以下の通りである。

グラフ：12月までの不適応行動の記録



※グラフの補足

介入前後の6月は、話をしたり、本人の気持ちを聞き取ったり、考えさせる機会を設けたりしていたが、気持ちを抑えられなくてイライラしている状況が多かった。

7月は、ほとんどイヤーマフをつけて生活ができたこと、宿泊学習に向けての事前指導等で気持ちがそちらに向いていたこと等が考えられる。

9月は、夏休み明けに気持ちが整わなかった。それ以降は、30日の運動会直前まで不適應行動はなかったが、行事で不安定になりやすい場合が多く、運動会前の疲れからくるイライラがあった。

10月は、後期児童会役員選挙に出て当選することを目標に、かなり自分で調整していた。予測を立てて教室を出たり、イヤーマフを使ったりする姿も見られるようになった。

11月以降は、『児童会役員』という肩書ができたこともあり、進んで望ましい行動をとったり、友だちに優しくできるようになった。

※エピソード

1月30日、対象児と実施者とが話をする機会を設けた。ボイスレコーダーで記録したものを、Q&A方式で、以下に記載する。

実「2学期ぐらいから、Kくんに優しくなったやん。なんで分かる？」

児「ふにゃふにゃ言わんくなったし、言ってもすぐ大丈夫になるから。」

実「ほんならふにゃふにゃ言うてたら、今でもイライラすると思う？」

児「しないよ。約束したし。」

実「誰と？」

児「みんな」

実「ちゃんと決めたこと守ってんねんな！じゃあLくんには？最近は大丈夫？」

児「ニャーってなったらうるさいけど、でも教室から出たら大丈夫」

実「最近そうしてるよな。ちゃんと自分で守ってえらいね。」

…以下省略

これまでは、特定の声を出す児童に対して客観視して原因を探ったり、理由を考えたりする前に、声に反応して「苦手だ」という思いが先行していた。しかし、冷静に分析を行うことで、「みんながんばっててちょっとカッコいいって思う」ようになってきた。

8月以降の気持ちの安定は、服薬の影響もあると考えているが、やはり役員という自分の使命感から来る言動も多く見受けられる。

【今後の見通し】

- ① 考える機会を多く持ち、特定の人だけでなく、その対応方法が汎化され、状況に応じて解決策や回避方法を見つけれられるようになって欲しいと思う。
- ② 経験や知識から来る道德観を、実際に行動に移せるようになって欲しいと思う。